

白い川の 白い町

山口裕一・作
北島新平・絵



N. D. C. 913/224p/22cm

白い川の白い町

1975年 5 月20日第二刷発行

著 者 山口 裕一©

発行者 東 政 彦

発行所 株式会社 アリス館牧新社

東京都新宿区簗笥町41

電話 (269) 2081~4

印刷所 株式会社 同朋舎

製本所 池田製本所

(分) 8393 (製) 06101 (出) 0144

白い川の白い町

山口裕一作

北島新平絵

アリス館牧新社

—もくじ—



白い川の白い町

一 白い川を見た

二 せともの祭^{まつり}

三 白い川の川原

四 瀬戸山^{せとやま}離散^{りさん}

五 白い崖^{がけ}

75

57

37

18

9



六 日本の国は松の国^{まつ}

七 目のかがやき

八 白い川調査団^{ちようさだん}

九 犯人^{はんぴん}を見つけたぞ！

十 二つの戦争^{せんそう}

198

171

151

124

104



白
い
川
の
白
い
町

一 白い川を見た

きみだったら、川の色は何色をぬる？

「そりや水色にきまつている」というかも知れないし、「いや、青だ」「緑だ」っていろんな意見が出るかも知れない。でも、「川の色は白だ」なんていう子は、まさかないだろうね。

だが、この地方では、みんなが白をぬる。幼稚園のちび坊主だって、川をかく時は、白いクレヨンにきまつている。牛乳が流れているようなまっ白な川だ。

その白い川を、アキラがはじめて見たのは、つい最近、夏休みになってからのことだ。アキラは、小学校の四年生だ。でも、白い川を見たことと夏休みとは、直接関係はない。

アキラのお父さんは新聞記者だ。そのお父さんが転勤になった。東京本社から名古屋の本社へだ。家中でいろいろな議論があつて、家族そろつて名古屋の郊外の団地に引越することになった。

いろいろな議論というとおおげさかもしれないが、問題は簡単にいうと、アキラのお姉さんのミドリがはいる高校をどこにするかということだった。東京の高校ということになると、お父さんは

一人で名古屋へ転勤しなければならぬ。つまり、ナゴチョン(注)になるわけだ。名古屋の高校にはいるということになると、中学三年という時期に転校するのは、いろいろな意味で不利になる。あるいは、きみの家でも、それに似たような話が、お父さんやお母さんの間であったかも知れないね。

〔注〕 ナゴチョンとは、流行語で、ナゴは名古屋、チョンはチョンガー（独身者、ひとりもの）の略。家族を離れて、お父さんがひとりだけで名古屋に転勤してきていることをいう。

結局、みんなといっしょに転勤したいというお父さんの意見が通ったのは、お父さんが議論で勝ったというより、べつべつでは生活できないということが、お母さんにもはっきりしたからだ。お父さんは、もう三十代といっても四十歳に近い年だけど、いちじ、ほかの会社にはいつてから入社したせいもあって月給が安かった。世帯を二つにわけると、いろいろな経費がかさむ。どう計算してみても、むりだということがわかった。

アキラにとって名古屋ははじめてだった。いや、こんなに遠くまで新幹線に乗ることもはじめてだった。だから東京駅のホームで見送りにきた大ぜいの人たちから、いっせいに「バンザイ」をされて、めんくらったし、すぐくはずかしかった。でも悪い気分はしなかった。お父さんが、何となくえらくなったような気がしたからだ。しかし、部長さんとかいう人にお父さんがペコペコ頭をさげているのは、少し気にいらなかった。家では、いつも、こわい人なんかだれもないといばっているくせに！

新幹線しんかんせんの二時間は、あつという間にすぎた。海も見えたし富士山ふじさんも見えた。富士山の近くで白い煙けむりをはいているたぐさんの工場いんしょうてきも印象的だった。

「あれが、ヘドロで有名ゆうめいになった田子ノ浦たごのうらだ。」

お父さんは、科学部の記者だった。だから公害こうがいについては、くわしい。

何よりアキラがびっくりしたのは、家が多いことだった。東京から名古屋まで、ほとんど家がなくなることはなかったし、ずっと町がつづいている。

「太平洋ベルト地帯たいへいすうちたい」とお父さんがいった。「東海道メガロポリスだ」とも教えてくれた。

「まるで、名古屋まで東京がつづいているみたいね。」

と、ミドリがいった時、みんなは、何となくほつとしてうなずいた。はじめて遠くへ引越ひっこするわけだけど、東京のつづきだと思えばたいしたことではない。それに、たったの二時間、ひかり号では東京のつぎの駅ではないか。

なにか手ちがいがあったのか、名古屋駅には社の人はだれも迎えむかえにきてくれていなかった。それで、そのまますぐ家にむかうことになった。アキラたちの新しい家に行くには、名古屋駅からまた国鉄こくてつに乗らなければならない。中央本線ちゅうおうほんせんだ。東京の中央線と区別くべつするために、駅にはつてある時刻表ひょうなどに、中央西線ちゅうおうさいせんとかいてあることもある。でもこの地方で中央西線と正確せいさくにいう人は一人もない。みんな、「中央線」「中央本線」だ。東京の中央線とは、長野県ながのけんの塩尻しおじりでつながっている。

名古屋から九つ目、三十分ぐらいのところの高蔵寺こうざうじという駅が、アキラたちのめざす駅だ。

新幹線しんかんせんのホームとちがって、名古屋駅の中央線ホームは何となく薄汚うすよれた感じだった。待ち時間がしばらくあったが、待合室まちあいしつがない。郵便物ゆうびんぶつや小荷物こにもつを運ぶ車が、ホームの上にごろごろ置いてあった。その車の上に新聞紙をしいて、みんなはすわった。

「新幹線しんかんせんとちがって、どうしてこう待遇たいぐうが悪いのだから。」

ミドリが、ぽつりとつぶやいた。みんなはだまったままだった。

二十分以上いじょう待たされて、やっと電車がはいってきた。青と白のツートンカラーで、東京―横須賀よこすかを走っている横須賀線よこすかせんとよくにている。型かたがまるっこく、古ぼけていた。

「こりや横須賀線よこすかせんのおさがりだよ。」

お父さんがじょうだんめかしていったが、だれもわらわなかった。みんなひどいところへ引越ひっこしてきたという感じがして、何となく心細かった。

アキラが白い川を見たのは、その電車の窓まどからだった。

電車は、名古屋の市内をぐるっと半周はんしゅうしてから北へむかう。白い川を見たのは、北へむかった電車が、名古屋の町をはずれたばかりの、鉄橋てつきょうの上だった。

「川が白い。白い川だ。」

アキラが思わずさげんだように、それは、ほんとに白い川だった。堤防ていぼうの中の両側りょうがわの川原も白かった。最初さいしよは、水がないのかと思った。しかし、まん中のところが動いている。それは、水の動きだった。ゆらめく水の流れがあった。白い川が流れていた。

「庄内川だよ」

とお父さんは、ぜんぜんおどろかない声でいった。

あまり大きな川ではなかったたので、通路の側にすわっていたお母さんとミドリは気がつかない。それほど鉄橋も短かった。

「もしかすると、ちがったかな。」

お父さんは、ほとんどひとりごとのようにつぶやいた。お父さんは、自分のいった名前にあまり自信がないのだった。

アキラは、みんながおどろかないので不満だった。川が白いなんて、そんなことあってもいいのだろうか。川は水色、青いにきまっている。最近には公害が多い。だから川が汚れることはある。でも、それにしてもまっ白な色の川なんて、まるで牛乳でも流したような川だ。もしかしたらほんとうに牛乳を流しているのかな。いろんなかわったことが起きる国だから、牛乳ぐらいすてているのかも知れない。東京の「夢の島」へ行くと、ステレオや冷蔵庫の、まだ使えるのがすてあるって、いつかテレビでいっていた。

車の中を見わたしても、アキラ以外の人たちはだれもおどろいているようすはなかった。それがアキラにはかえってふしぎだった。牛乳をすてるとしたら少しはおどろくはずだし……、やっぱり牛乳じゃないのかも知れない。

アキラがそんなことを考えている間に、電車は一つの駅にとまり、そしてまた、もう一度鉄橋の

上にかかっていた。

アキラは、自分の目をうたがった。また、白い川だ！　こんどは、さっきより少し大きい。白さは、さっきの川より少し薄^{うす}い感じだった。でも、やはり白いことは白い。

「お父さん、また、白い川だよ。」

お父さんは、少しこまった顔になった。

「ううん、もしかすると、こっちの方が庄内川^{しょうないがわ}かも知れないね。」

お父さんが気にしているのは、川の名前だった。川が白いということは、どうでもいいというようすだ。

「ねっ、どうして川が白いの？」

アキラが大きな声を出したので、こんどは、お母さんも、ミドリも気がついた。

「あら、ほんと。そういえば川が白いなんて変^{へん}ね、どうして？」
と、ミドリも興味^{きょうみ}ありげにいった。

「ああ、それか、それはね……。」

ほんとのことをいうと、お父さんは川のことどころではなかったのだ。名古屋駅にだれも迎^{むか}えにきてくれなかったことが、よほどショックだったので、アキラのことを、ずっとうわの空で聞^きいていたのだ。

「公害^{こうがい}だよ、きつと。何か白いものをすてているんだ。」

